

一般演題P2-4

当院における高気圧酸素治療活用方法の検討～イレウスについて～

栗原かおる¹⁾ 村上史和¹⁾ 手塚まなみ¹⁾中島隆行¹⁾ 上山秀雄¹⁾ 浦志崇久¹⁾千原新吾²⁾ 間野正衛³⁾1) 社会福祉法人 恩賜財団済生会 済生会二日市病院
臨床工学室2) 社会福祉法人 恩賜財団済生会 済生会二日市病院
血管外科3) 社会福祉法人 恩賜財団済生会 済生会二日市病院
消化器外科

【はじめに】本邦における高気圧酸素治療(以下HBOという)の現状は、危険との誤認識や診療保険点数安価による採算性の問題等により多くの施設が撤退し装置台数は減少傾向である。

このような現状の中、当院ではさらに地域支援病院としてのニーズに応えるべく救急医療体制の強化・各診療科の連携強化を図り、病院全体の活性化を促す目的として2012年8月高気圧酸素治療装置を導入し、2013年8月までの13ヶ月に66症例、のべ381回の治療を行った。内訳は救急181回、非救急200回であり、適応疾患はイレウス、難治性潰瘍を伴う末梢循環障害が多かった。

【目的】イレウス治療には様々な治療法がある。主に絶食・輸液等の全身管理に併せ、チューブ挿入による減圧治療や外科的手術(以下OPという)が行われている。このほか保存的治療の一つに高気圧酸素療法があり救急的適応である。今回、当院のイレウスの治療状況を調査することで高気圧酸素治療が有効利用されているかを検証し、今後の運用・活用方法の検討を行った。

【対象および方法】2012年8月から2013年8月までの13ヵ月間、イレウスで入院となった83症例を対象とした。イレウスの治療経過・入院期間・転帰などを検証した。

【結果】内訳は、イレウス83症例中、HBO施行群26例、保存のみ群56例、OP施行1例であった(図1)。転帰は、保存療法群で1例死亡以外は全例軽快退院であった。平均入院期間は、OP施行のみ12日、保存療法群12.58±2.60日、HBO群15.19±3.70日、HBO+OP群では24.4±10.03日であり、それぞれに分け比較したが特に有意差はみられなかった。平均HBO治療回数は、HBO全例3.96±0.50回、HBOのみ群で3.76±0.59回、HBO+OP群で4.8±0.55回であった。HBOのみ群の胃管有・無での治療回数には差

はみられなかった。HBOのみ群、HBO+OP群では差があったが、これは当院が基本1クール5回としており1クールしても効果が見られなければOP適応となっているためと思われる。発症日からHBO開始期間までの平均期間では特に差はみられず、1日目から2日目にはHBO開始となっていた。胃管挿入の場合、患者が初日からイベントが多いことを嫌い初日に胃管挿入し様子観察、2日目にHBO導入となることが多かった。

【結語】イレウスにおいてHBOは有効な治療法とされており、当院でもHBO件数で一番症例数が多い疾患であった。また、イレウス管挿入は高額であり侵襲的治療だが、HBOはイレウス管による減圧治療に比べ手技が容易で非侵襲的であり患者にとって良い治療法であるといえる。¹⁾

今回、イレウスの治療状況を調査することにより高気圧酸素治療の利用状況の把握・検討を行った。当院では、保存療法・HBO・HBO+OP共に治療成績や入院期間などに有意差はみられなかった。また、OP例では緊急以外全例第一選択としてHBOを使用されており、うまく活用されていたと感じられた。

当院のイレウス治療において保存療法のみでの治療が多かったが、平均入院期間では保存療法群・HBOのみ群に差は見られなかった事を考慮すると患者にとって侵襲の少ないHBOを積極的に利用してもらう余地があるのではないかと考えられた。

また、初期に介入し単回使用でもHBOを行う事により、より早期の症状軽減・負担軽減に貢献できるのではないかとと思われる。

今後、さらにHBOを活用してもらえるようクリティカルパスへの導入や、これまで同様の声掛けや勉強会などの啓蒙活動も引き続き行わなければならないと考える。



図1 治療経過内訳

【参考文献】

- 1) 安蒜聡:術後麻痺性イレウス及び癒着性腸閉塞症に対する高気圧酸素治療. 日本高気圧環境・潜水医学会雑誌 2009; 44 (4): 196-202